

【論文】

小・中学生，高校生の家庭でのあいさつと生活の満足度

山本 和人
(東京家政大学)

The relation between the regularity of the youths' greetings
exchange and their satisfaction of home life
—A survey of school children and students—

YAMAMOTO Kazuhito
(Tokyo-kasei University)

【要旨】

本稿は，埼玉県内に所在するある市における小・中学生，高校生合計697名，および，その親合計647名を対象とする，「学校外での生活に関する調査」（1999年9月実施）の結果の分析である。調査結果の中でも，児童・生徒と親について，家庭生活場面における児童・生徒の日常的な「あいさつ程度」と「生活満足度」，およびその関連，また，あいさつ程度と生活満足度を規定する要因の分析を，林の数量化理論Ⅰ類，Ⅱ類を用いて行った。

得られた結果として，①学年が高くなると家庭内でのあいさつをする程度（頻度）が減る傾向になる，②「おはよう」「おやすみなさい」を言えば「あいさつ」をしていると考えている，③家庭内での「あいさつ程度」を規定する要因は，「団欒時間」「学年」「家庭生活の満足度」等が大きい，④「家庭生活の満足度」は学年が低いほど高い，⑤生活の満足度を規定する要因は「団欒時間」が大きい，などが明らかとなった。

【キーワード】

小・中学生，高校生，あいさつ，家庭生活，生活の満足度，

はじめに

生涯学習審議会が答申「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ」（平成11年6月）をまとめた。生活体験や自然体験が豊富な子どもほど，道徳観や正義感が充実している傾向が見られるということ踏まえての答申であり，しばらく前から学校教育でも強調されている「生きる力」をはぐくむことが重要であるとしている。また，文部省も，「家庭教育は，基本的な生活習慣や倫理観，自制心，自立心など『生きる力』の基礎的な資質や能力を育成する

ものであり，すべての教育の出発点である」としている¹⁾。このような，家庭教育の必要性が指摘されている一方で，核家族化は進み，青少年の問題が指摘されるたびに，核家族における家庭教育の難しさが改めて実感される。

家庭におけるしつけ・社会化の一つとして，「あいさつ」がよく取り上げられる。それが家族関係，人間関係の基礎であるという考えがあるからであり，それは常識であると言ええる。しかし，「『個食』が増えている」という指摘や，朝食をとらない生徒の増加²⁾，あるいは，「家庭内での家族とのふれあいの希薄化」の指

摘³⁾は、家庭におけるあいさつでさえ、行われているかどうかを疑わせるものである。

本稿の目的

本稿では、上記のような問題意識から、調査結果に基づき、①家庭においてどのようなあいさつが、どの程度行われているか、また、家庭においてあいさつをする子としない子を分ける要因は何かを分析することにする。次に、②家庭における生活の満足度は、家庭における人間関係と大きくかわることが予想され、家庭生活の満足度がどのような要因に左右されるかを検討することである。

調査およびデータについて

調査は1999年9月23日～10月5日に実施したものである⁴⁾。子どもを対象とした「子ども調査」と、その父母・保護者を対象とした「親調査」の、2種類の調査である。既に単純集計結果など、一部、調査結果を発表してある⁵⁾。今回はその際のデータをもとにさらに検討を加えたものである。

今回の分析に使用したデータは、多変量解析(林の数量化理論Ⅰ類,Ⅱ類)の制約から、関

連する設問のすべての回答について、「不明」「無回答」を除いたため、子ども調査、親調査それぞれにおける有効回収データ数からかなりサンプル数を減らすことになった。①あいさつの分析では、子どもについては697票から650票に、親については541票から497票にそれぞれサンプル数が減少した。また、②家庭生活における満足度の分析では、子どもについては647票に、親については474票へと、それぞれ減る事になった。

I 小・中学生, 高校生の家庭でのあいさつの実態

既に指摘したが、「子ども調査」「親調査」の2つの調査では、親と子の間で回答に差が見られる個所が多かった。子どもの思いと親の思いとが必ずしも一致しないことや、見方などがすれ違っている傾向が見られている。あいさつのもので、子どもと親とでは、回答に差が見られた。この点について検討することにする。

1 子どもたちの回答

(1) 学年別に見たあいさつとその程度
学年別に、子どもたちがどのようなあいさつ

表1 「おはよう」というあいさつ

*学年別に見た子どもの回答 (N=650)。数値は%, ()内は実数。以下表5まで同様。

		毎日する	することが多い	ほとんどしない	しない	合計
小学校	5年	48.8	33.3	14.6	3.3	100.0 (123)
	6年	50.8	25.4	19.8	4.0	100.0 (126)
中学校	1年	38.8	20.9	23.9	16.4	100.0 (67)
	2年	35.6	32.2	25.4	6.8	100.0 (59)
	3年	33.3	20.3	27.5	18.8	100.0 (69)
高等学校	1年	27.9	17.6	33.8	20.6	100.0 (68)
	2年	23.9	18.3	26.8	31.0	100.0 (71)
	3年	29.9	16.4	29.9	23.9	100.0 (67)
合計		38.5	24.0	23.8	13.7	100.0 (650)

スピアマンの相関係数: 0.287

表2 「行ってきます」というあいさつ

		毎日する	することが多い	ほとんどしない	しない	合計
小学校	5年	77.2	17.9	4.9	—	100.0
	6年	74.6	20.6	4.0	0.8	100.0
中学校	1年	76.1	13.4	7.5	3.0	100.0
	2年	64.4	25.4	6.8	3.4	100.0
	3年	47.8	26.1	14.5	11.6	100.0
高等学校	1年	50.0	25.0	17.6	7.4	100.0
	2年	46.5	22.5	15.5	15.5	100.0
	3年	53.7	17.9	17.9	10.4	100.0
合計		63.7	20.8	10.0	5.0	100.0

スピアマンの相関係数：0.270

表3 「ただいま」というあいさつ

		毎日する	することが多い	ほとんどしない	しない	合計
小学校	5年	64.2	22.0	9.8	4.1	100.0
	6年	67.5	19.0	7.9	5.6	100.0
中学校	1年	62.7	19.4	13.4	4.5	100.0
	2年	54.2	23.7	16.9	5.1	100.0
	3年	42.0	18.8	20.3	18.8	100.0
高等学校	1年	42.6	26.5	19.1	11.8	100.0
	2年	42.3	16.9	21.1	19.7	100.0
	3年	41.8	16.4	28.4	13.4	100.0
合計		54.5	20.3	15.7	9.5	100.0

スピアマンの相関係数：0.239

表4 「おやすみなさい」というあいさつ

		毎日する	することが多い	ほとんどしない	しない	合計
小学校	5年	62.6	17.9	17.1	2.4	100.0
	6年	61.1	24.6	8.7	5.6	100.0
中学校	1年	47.8	25.4	16.4	10.4	100.0
	2年	37.3	33.9	20.3	8.5	100.0
	3年	29.0	24.6	20.3	26.1	100.0
高等学校	1年	27.9	17.6	29.4	25.0	100.0
	2年	15.5	22.5	25.4	36.6	100.0
	3年	14.9	23.9	29.9	31.3	100.0
合計		41.2	23.2	19.5	16.0	100.0

スピアマンの相関係数：0.423

表5 「ありがとう」というあいさつ

		毎日する	することが多い	ほとんどしない	しない	合計
小学校	5年	41.5	46.3	10.6	1.6	100.0
	6年	47.6	38.9	11.9	1.6	100.0
中学校	1年	31.3	49.3	16.4	3.0	100.0
	2年	25.4	52.5	18.6	3.4	100.0
	3年	20.3	49.3	23.2	7.2	100.0
高等学校	1年	22.1	39.7	29.4	8.8	100.0
	2年	22.5	42.3	21.1	14.1	100.0
	3年	14.9	49.3	32.8	3.0	100.0
合計		31.1	45.2	18.9	4.8	100.0

スピアマンの相関係数：0.273

表6 学年別に見た「あいさつ得点」の分布（多変量解析にかける関係でサンプル数は650）

—子どもの場合

		5点	6点	7点	8点	9点	10点	11点	12点	13点	14点	15点	16点	17点	18点	19点	20点	合計
小	5	—	—	—	2	—	4	—	—	4	7	11	13	18	22	23	30	126
	6	—	1	—	1	1	—	2	5	3	5	6	19	20	14	20	29	126
中	1	1	1	—	1	3	1	2	1	3	7	7	6	3	7	10	14	67
	2	—	—	2	1	1	2	—	4	2	6	9	6	3	9	4	10	61
	3	4	—	2	2	3	3	11	2	4	3	5	4	3	12	5	6	69
高	1	—	4	1	2	3	4	8	7	5	4	2	6	1	7	8	6	68
	2	5	3	3	2	4	4	5	8	4	5	3	5	5	3	5	7	71
	3	—	2	3	4	3	8	3	6	5	—	8	3	9	6	5	2	67
合計		10	11	11	15	18	26	31	33	30	37	51	62	62	80	69	104	650

スピアマンの相関係数：-0.369

を、どの程度行っているかを示すのが、表1から表5である。それぞれの表下の示すように、相関係数を出した結果は、どちらかといえば学年が上になるほど、あいさつをしなくなる。特に、「おやすみなさい」というあいさつの場合、はっきりとその傾向がうかがえる。

(2) 子どもたちの「あいさつ（程度）得点」

子どもたちがどの程度あいさつをしているかを得点化した得点分布は表6のとおりであった。ここでは、上記の5つの質問について、それぞれ回答を、毎日する=4点、することが多い=3点、ほとんどしない=2点、しない=1

表7 「あいさつ得点」と個別の「あいさつ程度」との相関（子どもの場合）

あいさつ内容	スピアマンの相関係数
(1) おはよう	0.850
(2) 行ってきます	0.739
(3) ただいま	0.774
(4) おやすみなさい	0.833
(5) ありがとう	0.692

点、とした。その上で、5問の合計点を求め、あいさつをする程度が多いほど得点が高くなるように数値化した。

表6から見られるように，低学年ほどあいさつ得点は高い。

また，あいさつの程度が多いほど高い得点になるよう得点化し，その合計点との関連を見ると，表7のとおり，高い相関となった。特に，「おはよう」「おやすみなさい」を言っている場合には全体としてもあいさつ程度が高くなるのがわかる。「ありがとう」というあいさつは最も小さな値となっている。

2 親の回答

上の1で見たように，親の回答についても同

様の操作をした。すなわち，「子どもはどの程度あいさつをしているのか」を，それぞれについての親の判断を求めた結果である。

表8～表12の下に示すように，学年とクロス集計ではいずれもほとんど相関関係が見られない。親の回答は学年による違いがない。それは親は子どもがいくつになっても見る目が同じということなのか，子どもの成長・発達を考慮した上で，「この年齢の子どもはこのような程度のあいさつをするもの」といった基準ができていくということなのか。しかし，子どもの年齢が異なっても，回答に変化がないということは

表8 「おはよう」というあいさつ

*学年別に見た親の回答 (N=497)。数値は%，() 内は実数。以下表12まで同様。

		毎日する	することが多い	ほとんどしない	しない	合計
小学校	5年	61.0	30.0	9.0	—	100.0 (100)
	6年	66.1	23.2	10.7	—	100.0 (112)
中学校	1年	59.3	30.5	8.5	1.7	100.0 (59)
	2年	57.1	24.5	16.3	2.00	100.0 (49)
	3年	44.4	37.0	16.7	1.9	100.0 (54)
高等学校	1年	50.0	25.0	23.1	1.9	100.0 (52)
	2年	48.5	18.2	24.2	9.1	100.0 (33)
	3年	36.8	39.5	13.2	10.5	100.0 (38)
合計		55.9	28.2	13.7	2.2	100.0 (497)

スピアマンの相関係数：0.183

表9 「行ってきます」というあいさつ

		毎日する	することが多い	ほとんどしない	しない	合計
小学校	5年	87.0	11.0	2.0	—	100.0
	6年	83.0	15.2	1.8	—	100.0
中学校	1年	74.6	22.0	1.7	1.7	100.0
	2年	73.5	24.5	2.0	—	100.0
	3年	70.4	25.9	3.7	—	100.0
高等学校	1年	69.2	19.2	9.6	1.9	100.0
	2年	57.6	24.2	12.1	6.1	100.0
	3年	65.8	26.3	7.9	—	100.0
合計		76.1	19.1	4.0	0.8	100.0

スピアマンの相関係数：0.204

表10 「ただいま」というあいさつ

		毎日する	することが多い	ほとんどしない	しない	合計
小学校	5年	77.0	18.0	4.0	1.0	100.0
	6年	77.7	18.8	2.7	0.9	100.0
中学校	1年	71.2	20.3	6.8	1.7	100.0
	2年	73.5	20.4	6.1	—	100.0
	3年	68.5	18.5	11.1	1.9	100.0
高等学校	1年	67.3	15.4	15.4	1.9	100.0
	2年	51.5	18.2	18.2	12.1	100.0
	3年	57.9	28.9	10.5	2.6	100.0
合計		71.0	19.3	7.6	2.0	100.0

スピアマンの相関係数：0.165

表11 「おやすみなさい」というあいさつ

		毎日する	することが多い	ほとんどしない	しない	合計
小学校	5年	73.0	17.0	7.0	3.0	100.0
	6年	71.4	21.4	7.1	—	100.0
中学校	1年	66.1	27.1	5.1	1.7	100.0
	2年	57.1	36.7	6.1	—	100.0
	3年	51.9	29.6	18.5	—	100.0
高等学校	1年	38.5	34.6	25.0	1.9	100.0
	2年	33.3	33.3	21.2	12.1	100.0
	3年	34.2	31.6	21.1	13.2	100.0
合計		58.8	26.6	11.9	2.8	100.0

スピアマンの相関係数：0.303

表12 「ありがとう」というあいさつ

		毎日する	することが多い	ほとんどしない	しない	合計
小学校	5年	62.0	33.0	5.0	—	100.0
	6年	62.5	35.7	1.8	—	100.0
中学校	1年	57.6	33.9	8.5	—	100.0
	2年	69.4	28.6	2.0	—	100.0
	3年	44.4	50.0	5.6	—	100.0
高等学校	1年	57.7	38.5	3.8	—	100.0
	2年	63.6	27.3	9.1	—	100.0
	3年	34.2	60.5	5.3	—	100.0
合計		57.9	37.4	4.6	—	100.0

スピアマンの相関係数：0.099

表13 「あいさつ得点」と個別の「あいさつ程度」
との相関（親の場合）

あいさつ内容	スピアマンの相関係数
(1) おはよう	0.782
(2) 行ってきます	0.657
(3) ただいま	0.712
(4) おやすみなさい	0.775
(5) ありがとう	0.595

指摘できる。

表は省略するが、あいさつ得点と学年との相関係数は -0.262 であり、子どもの場合と同じく、学年が高くなるにつれて得点が低くなる傾向が見られる。しかし、「子どもは親ほどにあいさつをしているとは思っていない」し、「親は子どもが自覚している以上にあいさつをしている」と思っていることが分かる。

また、上記表13のとおり、「おはよう」「おやすみなさい」と子どもがあいさつを行っている場合に、得点が高くなる。「ありがとう」というあいさつは、子どもの場合と同様、あまり行われていないことを示している。

3 あいさつを「する子」と「しない子」の環境の違い—規定要因の分析

では、「あいさつをする子」と「あいさつをしない子」の生活環境等の違いはどこにあるのであろうか。これまで分析した「あいさつ得点」を手がかりに、今回は、林の数量化理論Ⅰ類によって分析することとした。

分析の際の操作はまず、「あいさつ得点」を外的基準（従属変数）とし、説明変数（独立変数）＝規定要因としては、表14に示すとおり、学年、性別、祖父母の有無、共働きかどうか、言葉遣いに対する注意の程度、朝起こしてもらうかどうか、家で過ごす時間、家での手伝い時間、家族の団欒の時間、家族旅行の有無、子どもの趣味の有無、自分だけの部屋の有無、家庭

生活の満足度、を取り上げた。今回このように多くの要因を取り上げたのは、要因探索を狙ったことである。

(1) 子どもの場合の分析

林の数量化理論Ⅰ類による解析の結果は表14、表15に示すとおりである。

今回の探索では、重相関係数の二乗値が 0.3897 であり、必ずしも十分な説明力をもっているとはいえない。まず、表15のレンジの大きさの順位から見ると、家での家族の団欒時間、学年、家庭生活の満足度、家での手伝い時間、共働きかどうか、といった要因が大きいことがわかる。

また、表14のカテゴリ数量から、団欒時間は多いほど、学年は低いほど、また、家庭生活への満足度が高いほど、子どもたちがあいさつをする得点は高くなる。逆に、団欒時間が少なく、学年が高くなり、家庭生活への不満が高いほど、あいさつが少なくなる。

(2) 親から見た場合の分析

子どもの場合と同じく、「あいさつ得点」を求め、規定要因して取り上げたのは、表16に示すとおりである。要因の数は、子どもの場合と異なり、「親の性別」を加えた。また、「家で過ごす時間」のカテゴリでは、「1時間未満」という選択肢に親の回答がなかったため、カテゴリから除いてある。

表16、表17から分かるとおり、数値、順位は異なるものの、子どもの場合と同じようなアイテム（規定要因）が、並んでいる。レンジの大きな要因から示せば、家での手伝い時間、家族の団欒時間、（親自身の）家庭生活の満足度、学年、などである。

また、「あいさつ得点」が高くなるのは、親の判断として、家での手伝いをする時間が長く、家族の団欒時間は長く、親自身の家庭生活の満足度が高く、子どもは低学年で、子どもが趣味をもっているという場合である。

表14 規定要因として選択したアイテム, カテゴリ, カテゴリ数量

アイテム	カテゴリー	カテゴリ数量	アイテム	カテゴリー	カテゴリ数量	アイテム	カテゴリー	カテゴリ数量	
学 年	小学校 5 年	1.163108	家で過ごす時間	1 時間未満	-0.06537	自分だけの部屋の有無	ある	-0.10726	
	小学校 6 年	0.639149		1 時間以上 2 時間未満	0.257971		ない	0.157838	
	中学校 1 年	0.449219		2 時間以上 3 時間未満	-0.30447	家庭生活の満足度	たいへん満足	0.894278	
	中学校 2 年	0.385969		3 時間以上 5 時間未満	0.012458		どちらかといえば満足	-0.36108	
	中学校 3 年	-0.7042		5 時間以上	0.031925		どちらかといえば不満	-0.68596	
	高等学校 1 年	-1.15126		家での手伝い時間	ほとんどない	-0.55146	定数項	たいへん不満	-1.27968
	高等学校 2 年	-1.00245			30分以内	0.280532		15.41846	
	高等学校 3 年	-1.17038			1 時間以内	0.758221			
2 時間以内			-0.12368						
性 別	男	-0.47366	家族の団欒時間	2 時間を越える	1.45568				
	女	0.42134		ほとんどない	-2.1677				
共 働 き	共働き	-0.31671	家族の団欒時間	30分以内	0.220324				
	どちらか片方	0.497639		1 時間以内	0.387744				
	その他	-1.25097		2 時間以内	0.41348				
言葉遣いへの注意	よくしかる	-0.30994	家族旅行の有無	2 時間を越える	1.166466				
	ときどきしかる	0.140581		ある	0.189028				
	あまりしからない	-0.03514		ない	-0.47512				
朝起こしてもらおう	いつも起こしてもらおう	-0.04601	趣味の有無	ある	0.211312				
	ときどき起こしてもらおう	-0.10252		ない	-0.67483				
	起こしてもらおうことはない	0.259885							

表15 アイテム, レンジ, 単相関, 偏相関

ア イ テ ム	レンジの順位	レ ン ジ	単 相 関	偏 相 関
学年	2	2.333486	0.3932	0.2381
性別	6	0.895004	0.1673	0.1373
共働き	5	1.74861	0.1508	0.1398
言葉遣いへの注意	10	0.450519	0.0791	0.0514
朝起こしてもらおう	11	0.362403	0.0001	0.0457
家で過ごす時間	9	0.562443	0.0410	0.0370
家での手伝い時間	4	2.007143	0.3204	0.1522
家族の団欒時間	1	3.334161	0.4327	0.2854
家族旅行の有無	8	0.664151	0.2500	0.0898
趣味の有無	7	0.886146	0.1840	0.1185
自分だけの部屋の有無	12	0.265102	0.1479	0.0396
家庭生活の満足度	3	2.173959	0.3657	0.1986

重相関係数: 0.6243 重相関係数の二乗: 0.3897

表16 規定要因として選択したアイテム，カテゴリ，カテゴリ数量

アイテム	カテゴリー	カテゴリ数量			
学 年	小学校 5 年	0.362476	家での手伝い時間	ほとんどない	-0.101
	小学校 6 年	0.509255		30分以内	0.020076
	中学校 1 年	0.510665		1 時間以内	0.451209
	中学校 2 年	-0.00858		2 時間以内	4.496097
	中学校 3 年	-0.29414		2 時間を越える	1.732199
	高等学校 1 年	-0.46438	家族との団欒時間	ほとんどない	-1.41556
	高等学校 2 年	-1.41602		30分以内	-0.73296
高等学校 3 年	-0.9535	1 時間以内		0.157872	
子どもの性別	男子	0.104929	家族旅行の有無	2 時間以内	0.339437
	女子	-0.11035		2 時間を越える	0.761878
	両方	0.055477		あり	0.141105
親の性別	男	-0.20154	子どもの趣味の有無	なし	-0.61297
	女	0.012032		あり	0.077113
共 働 き	共働き	-0.03616	子どもだけの部屋の有無	なし	0.500638
	どちらか片方	0.06504		わからない	-0.58143
	その他	-0.60719		あり	-0.23714
言葉遣いへの注意	よくしかる	-0.23583	親の家庭生活の満足度	なし	0.279784
	ときどきしかる	0.109984		たいへん満足	0.535857
	あまりしからない	-0.14146		どちらかといえば満足	0.026144
朝起こしてもらおう	いつも起こしてもらおう	-0.19802		どちらかといえば不満	-1.47521
	ときどき起こしてもらおう	0.157962		たいへん不満	-0.79467
	起こしてもらおうことはない	0.241171		定 数 項	17.62173
家で過ごす時間	1 時間以上 2 時間未満	-0.48165			
	2 時間以上 3 時間未満	0.15226			
	3 時間以上 5 時間未満	0.162906			
	5 時間以上	-0.19283			
	1 時間以上 2 時間未満	0.168916			

なお、逆に、どのような場合にあいさつ得点が低くなるかといえば、家での手伝い時間が短く、家族の団欒時間が少なく、親自身も家庭生活に対する満足度が低く、子どもは高学年（高校生）になり、何も趣味を持っていないような子どもであるとみなしている場合であり、親の判断として、「あいさつをしない」と考えることになると見られる。

今回の分析では、子どもの場合ほど重相関係数の二乗値が高くはなかった。したがって、別な要因を考える事が必要となろう。それに対する検討は今後の課題である。

II 家庭生活に対する満足度の親と子どもの違い

次に、家庭での生活を子どもや親ほどの程度

表17 アイテム，レンジ，単相関，偏相関

ア イ テ ム	レンジの順位	レ ン ジ	単 相 関	偏 相 関
学年	4	1.926685	0.2903	0.2304
子どもの性別	11	0.215279	-0.0036	0.0437
親の性別	12	0.213574	0.0439	0.0211
共働き	7	0.672233	0.0204	0.0431
言葉遣いへの注意	10	0.345811	0.0199	0.0598
朝起こしてもらう	9	0.439195	0.0710	0.0831
家で過ごす時間	8	0.65057	0.0697	0.0769
家での手伝い時間	1	4.597097	0.1069	0.1096
家族の団欒時間	2	2.177436	0.2850	0.2257
家族旅行の有無	6	0.754075	0.2281	0.1205
趣味の有無	5	1.082067	0.1218	0.1379
自分だけの部屋の有無	8	0.516925	0.1398	0.1051
親の家庭生活の満足度	3	2.011066	0.2658	0.2274

重相関係数：0.5065 重相関係数の二乗：0.2566

満足しているかを検討することにする。

核家族化や少子化は，子どもたちにだけでなく，少なからず家族全員にストレスを与えるものでもある。先に見たように，あいさつの程度も，家庭生活意の満足度と無関係ではない。子どもたちの家庭での満足度が，家庭教育の場面でさまざまな影響を与えるであろうことは想像

できる。

1 子どもの回答と親の回答

学年ごとに家庭生活の満足度が表18（子どもの場合），表19（親の場合）である。

子ども調査の結果では，緩やかではあるが学年との相関があり，この場合，学年が高くなる

表18 子どもの「家庭生活に対する満足度」 数値は%，（ ）内は実数。

		たいへん満足している	どちらかといえば満足している	どちらかといえば不満である	たいへん不満である	合 計
小 学 校	5年	51.2	41.6	6.4	0.8	100.0 (125)
	6年	56.3	38.9	4.0	0.8	100.0 (126)
中 学 校	1年	41.5	41.5	15.4	1.5	100.0 (65)
	2年	29.0	50.0	11.3	9.7	100.0 (62)
	3年	19.4	46.3	28.4	6.0	100.0 (67)
高 等 学 校	1年	19.1	52.9	22.1	5.9	100.0 (68)
	2年	16.7	56.1	19.7	7.6	100.0 (66)
	3年	23.5	51.5	16.2	8.8	100.0 (68)
合 計		36.0	46.1	13.6	4.3	100.0 (647)

スピアマンの相関係数：0.325 χ 二乗値：97.477**

表19 親の「家庭生活に対する満足度」 数値は%，（ ）内は実数。

		たいへん満足して いる	どちらかといえば 満足している	どちらかといえば 不満である	たいへん不満であ る	合 計
小 学 校	5 年	32.7	54.1	11.2	2.0	100.0 (98)
	6 年	24.3	61.7	13.1	0.9	100.0 (107)
中 学 校	1 年	20.0	65.5	12.7	1.8	100.0 (55)
	2 年	44.4	46.7	8.9	—	100.0 (45)
	3 年	24.1	66.7	9.3	—	100.0 (54)
高等学校	1 年	22.4	71.4	6.1	—	100.0 (49)
	2 年	19.4	67.7	9.7	3.2	100.0 (31)
	3 年	20.0	68.6	8.6	2.9	100.0 (35)
合 計		26.6	61.6	10.5	1.3	100.0 (474)

スピアマンの相関係数：0.028 χ 二乗値：20.020 (有意差なし)

表20 規定要因として選択したアイテム，カテゴリ，カテゴリ数量

アイテム	カテゴリ	第1軸	アイテム	カテゴリ	第1軸	アイテム	カテゴリ	第1軸
学 年	小学校5年	0.4901	夕 食	毎日食べている	0.0000	家族旅行	1時間以内	0.4937
	小学校6年	0.4548		よく食べている	-0.0564		2時間以内	0.2443
	中学校1年	0.0926		あまり食べない	0.2756		2時間を越える	0.5757
	中学校2年	-0.1582	過ごす時	1時間未満	-1.2800	おしゃべり時間	あり	0.0960
	中学校3年	-0.7687		1時間以上2時間未満	-0.5069		なし	-0.2491
	高等学校1年	-0.5128		2時間以上3時間未満	0.1795	0	0.1008	
	高等学校2年	-0.1909		3時間以上5時間未満	0.0216	30分以内	-0.2976	
	高等学校3年	-0.2325		5時間以上	0.0335	1時間以内	0.0488	
性 別	男	0.1736	手 伝 い	ほとんどない	0.0382	自分の部	2時間以内	0.2752
	女	-0.1511		30分以内	0.0028		2時間を越える	-0.1253
共 働 き	とも働き	0.1185		1時間以内	-0.0392	自分の部	あり	0.0620
	どちらか片方	-0.2455		2時間以内	0.2665		なし	-0.0894
	その他	1.3887		2時間を越える	-1.2182		/	
帰宅時間	よくしかる	-0.5694		ほとんどない	0.0719			
	ときどきしかる	0.1581		30分以内	0.0356			
	ほとんどしからない	0.0469		1時間以内	-0.1404			
朝 食	毎日食べている	0.1383	団 欒	2時間以内	-0.0551			
	よく食べている	-0.3396		2時間を越える	0.1115			
	あまり食べない	-0.5111		ほとんどない	-1.0829			
	食べない	0.0642		30分以内	-0.2116			

と不満に思う子どもが多くなる。「たいへん満足している」という子どもは、小学校では50%を超えるが、中学生では学年とともに激減し、高校2年生では16.7%しかいない。

親調査の結果では、「たいへん満足している」という比率は、子どもに比べて全体として10%ほど少なくなっているし、「どちらかといえば満足している」という回答は子どもよりも親のほうが15%ほど多い。「たいへん満足している」という回答で見ると、親は子どもたちほどには満足していない。数値にはかなりギャップがあるといえる。

また、「どちらかといえば不満である」という回答は、小学生をもつ親の場合に多い。このことを考え合わせると、「親の方が家庭生活に不満をもっている」ということになるのであろうか。ここでは理由は明確ではないが、この点はさらに検討する必要がある。

2 家庭生活の満足度を規定する要因（数量化Ⅱ類による結果）—子どもの場合

家庭生活の満足度の規定要因を探るため、ここではまず、満足しているグループと不満に思っているグループとに分けた。その判定に際しては、設問の回答をもとに、満足度が高いグループ（「たいへん満足している」あるいは「どちらかといえば満足している」と回答したグループ）と低いグループ（「どちらかといえば不満である」あるいは「どちらかといえば不満である」と回答したグループ）との2群に分けた。

この操作をする中で、最終的に分析にかけることができたデータ数は647となった。

表20, 表21は、「満足群」「不満足群」を分ける要因とその重みを示している。

表21に示すように、アイテム・レンジは、家族の団欒があるか、共働きかどうか、家で手伝いをどのくらいするか、家で過ごす時間の多さ、学年、といった変数が大きい。すなわち、

表21 アイテム, レンジ, 単相関係数, 偏相関係数

第1軸						
アイテム	レンジ	レンジ順位	単相関係数		偏相関係数	
学年	1.2589	5	学年	0.2667	学年	0.2135
性別	0.3247	11	子の性別	-0.0003	子の性別	0.0838
共働き	1.6342	2	共働き	0.0461	共働き	0.1463
帰宅時間	0.7274	6	帰宅時間	0.1098	帰宅時間	0.1263
朝食	0.6494	7	朝食	0.1712	朝食	0.1249
夕食	0.3320	10	夕食	-0.0024	夕食	0.0239
過ごす時	1.4596	4	過ごす時	0.1233	過ごす時	0.1026
手伝い	1.4848	3	手伝い	0.0650	手伝い	0.0809
趣味時間	0.2520	12	趣味	-0.0176	趣味	0.0520
団欒時間	1.6586	1	団欒	0.3406	団欒	0.2717
家族旅行	0.3451	9	家族旅行	0.1774	家族旅行	0.0794
おしゃべり時間	0.5727	8	おしゃべり時間	0.1735	おしゃべり時間	0.0982
自分の部	0.1515	13	自分の部	-0.0534	自分の部	0.0390

相関比: 0.2287 軸の重心: 第1軸; 0.2234, 第2軸; -1.0225

子どもたちの家庭生活の満足度は，家族の会話や団欒時間が多く，共働きではなく，手伝い時間や家にいる時間もほどほどに，という場合に高くなることになる。

Ⅲ 分析とまとめ

今回の調査はパイロット・サーベイとして，地域や学校抽出のサンプリング等の面では限定して実施したものであり，本稿はその結果の分析であった。残された課題もある。しかし，今回のテストデータの中で明らかになったことがらを，いくつか仮説的に指摘する。

まずこのような調査の意義であるが，家庭教育場面における親子のかかわりを考える際に，最も基本となると考えられる家族間（親子間）における「あいさつ」が，家庭においてどの程度，どのようなあいさつが行われているかを調べることは，家庭が教育力を持ちうるかどうかを知ることにつながるのではないかとこのところにある。

実際，親子間の感情や考え方・見方にずれがあった。「子どもがわからない」という言葉をよく耳にするが，親子の思いに違いがあることが見て取れる。今回の結果から言えば，子どもはあいさつをしていないと想定しているが，親はそこそこの挨拶をしていると考えている。

結果から仮説的に言えることは，次のようなことであろう。

- (1) 学年が上になるほど，家庭内でのあいさつ程度は低くなる。
- (2) あいさつをするかどうかの判断は，「おはよう」「おやすみなさい」と相関がある。
- (3) 「ありがとう」というあいさつをする程度は学年が高くなると減ってくる。
- (4) 林の数量化理論Ⅰ類による分析では，「あいさつ（程度）得点」の高低を左右する要因は，子ども本人の場合，大きい順から，①家庭での団欒時間，②学年，③家庭

生活の満足度，④家での手伝い時間，⑤親が共働きかどうか，等である。親では，その要因は，①家での手伝い時間，②家庭での団欒時間，③（親自身の）家庭生活の満足度，④学年，⑤子どもの趣味の有無，等である。

- (5) 家庭生活の満足度は，子どもの場合，学年が低いほど高い，という結果であった。親の場合，学年との関連は薄く，全体として満足度は子どもより低い。特に，小学校児童の親の場合，「たいへん満足している」という回答は，児童のそれのおよそ半分である。（家庭生活に満足していない親との関係はたいへん気になるところである。）
- (6) 林の数量化理論Ⅱ類による，生活満足度の高低を左右する要因の分析では，子どもの場合，①家庭での団欒時間，②共働きかどうか，③家での手伝いの程度，⑤家で過ごす時間，⑤学年，などが大きな要因である。

注

- 1) 文部省編，『平成11年度 わが国の文教施策 進む「教育改革」』，1999年12月7日，pp. 231-326
- 2) 足立己幸・NHK「子どもたちの食卓」プロジェクト著，『NHKスペシャル 知っていますか子どもたちの食卓—食生活からからだと心がみえる』，NHK出版，2000年2月25日，
- 3) 池本 要，「子どもの体験活動の実態と課題—自然・人・地域とのふれあい調査を通して—」，『日本生涯教育学会論集』，19（1998年度），日本生涯教育学会，1998年7月31日，pp. 49-56
- 4) 埼玉県狭山市内に所在する，小学校（2校，各学年1クラス），中学校（1校，各学年1クラス），高等学校（1校，各学年1クラス），および，その生徒の父母・保護者（各学校，学年，クラスは同様）に対して実施した。抽出した学校はそれぞれ市内の代表すると思われる学校を選んだ。有効回収数は以下の通り。生徒は，I小学校5年生63，6年生60，M小学校5年生73，6年生74，I中学校1年生71，2年生65，3年生73，S高等学校1年生73，2年生74，3年生71，合計697。親はそれぞれ，53，47，55，73，62，55，61，55，36，44，の合計541。有効回収

率は，生徒の総計で91.1%，父母・保護者の合計で70.8%であった。

- 5) 次の2点がそれである。①山本和人・彦根 忍・加藤優子・山下康吉・栗原梅次，「青少年の学校外での生活を支える社会教育，家庭教育の役割」，埼玉県狭山市立教育センター，『狭山市教育センター研究紀要第9号 21世紀を見据え生きる力を育てる教育の創造Ⅱ』，pp. 70-79，2000年3月。②山本和人，「児童・生徒の地域および家庭での生活を支える社会教育」，創価大学社会教育主事課程，『創価大学社会教育主事課程年報No.3』，pp. 15-28，2000年4月2日。